

氏名(国籍)	呉 佩 珍 (台湾)
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	博甲第3297号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	太平洋を越える「新しい女」 -田村(佐藤)俊子にみるジェンダー・人種・階級-
主査	筑波大学教授 博士(文学) 荒木正純
副査	筑波大学教授 新保邦寛
副査	筑波大学講師 平石典子
副査	筑波大学講師 吉原ゆかり
副査	筑波大学教授 文学博士 堀池信夫

論文の内容の要旨

本論文は、大正・昭和を作家として生きた田村(佐藤)俊子の活動の足跡を、日本・北米・中国にもとめ、「青鞥」グループの一員として女性解放運動にたずさわった時期から、バンクーバーの日本人移住者のあいだで労働運動にかかわった時期、さらに晩年、中国・上海で中国雑誌の編集長として活躍した時期に、俊子がどのような思想的変遷をたどったかを論じたものである。

本論文の構成は、以下のとおり。

序章

I部 ドメスティック・イデオロギーへの挑戦：田村俊子にみるジェンダーの諸問題

第1章 女学生世界＝ノー・マンズ・ランド：田村俊子の『あきらめ』について

第2章 1910年代の日本における「女性同性愛」言説：「青鞥」同人を中心に

第3章 ドメスティック・イデオロギーからの脱出願望：田村俊子の〈書く女〉と〈演じる女〉について

II部 カナダのバンクーバーにおける思想的変遷：日系社会問題をめぐって

第4章 〈渡米熱〉、〈墮落女学生〉と『大陸日報』にみる〈写婚妻〉像

第5章 ナショナル・アイデンティティとジェンダーの揺らぎ：佐藤俊子の日系二世を描く小説群にみる二重差別構造

第6章 佐藤俊子の人種問題への認識及び社会主義的立場：「小さき歩み」三部作を軸として

III部 インターナショナル・フェミニストの提携：上海時代の佐藤(田村)俊子と中国女性問題

第7章 上海時代(1942～45)の佐藤(田村)俊子と中国女性作家・関露：中国語女性雑誌『女聲』をめぐって

第8章 日本占領下の上海における女性問題の変容：プロパガンダ誌の女性文学と『女聲』をめぐって

結章

参考文献 / 図版一覧 / 初出一覧

第Ⅰ部では、俊子が描く多くの「女学生上がり」にみられるジェンダー・セクシュアリティのあり方をふまえて、俊子自身がそうした問題にいかなる問題意識を抱いていたかを解明し、さらに彼女がどのように、ドメスティック・イデオロギー＝＜家庭＞＝＜日本国内＞からの脱出願望を呈示したかを明らかにしている。第1章では、デビュー作『あきらめ』を中心に、「女学生世界」形成・崩壊の過程と、女学生の「同性愛」と「自立」問題の消長が平行的に読み取られ、初期俊子の問題意識の一端をしめしている。第2章では、俊子と「青鞥」同人が、レズビアン・パフォーマンスによって、どのように、家父長制度が強制する異性愛を基盤とした良妻賢母制度に異議申し立てをおこなったか、そして、それが社会にいかなる影響をもたらしたかが検証されている。第3章では、「女学生上がり」が、ドメスティック・イデオロギーの抑圧からの脱出願望を抱くにいたるその過程を、いかに俊子が描いたかをあつかっている。

第Ⅱ部では、俊子が1936年から1938年にかけて書いた日系二世をめぐる作品をてがかりとして、彼女がいかにジェンダー諸問題と日系社会で発見した人種・階級問題とをむすびつけ、その解決策として社会主義に傾倒していく過程を解明している。第4章では、「女学生上がり」と「写婚妻」との関係をもとに、パンクパー時代の俊子が、日系紙『大陸日報』で婦女欄を創設して写婚妻を読者と想定し、いかに彼女たちを啓蒙したかを解明している。第5章では、日系社会を描いた作品群をもとに、俊子がカナダで出会った人種・階級問題によって、彼女が抱えていた女性問題意識がいかに変化したかをたどっている。第6章では、日系二世を描いた三部作「小さき歩み」に見られる社会主義者と当時の社会主義思潮をふまえ、日系二世たちが、社会主義への傾倒をかいして、白人社会から疎外された「移民労働者」階級といかなる連携関係を構築したか明らかにし、もって、俊子の社会主義思想形成の軌跡をたどっている。

第Ⅲ部では、彼女の社会主義的立場を前提として、俊子が上海で中国共産党地下工作員・関露をアシスタントとして出版した中国語雑誌『女聲』に見られる女性問題の言説から、俊子晩年の思想に底流していたコスモポリタニズムを解明している。第7章では、『女聲』をもとにして、俊子が社会主義を信奉することで、日本占領下の上海で、いかに国際的反戦運動のシンパに転身したかを、カナダ時代の国際労働運動体験をふまえて論じている。第8章では、『女聲』「読者投書欄」に見られる女性問題と、同時期の中国女性作家が描く女性問題とを対比して、晩年の俊子が中国女性問題にたいしていかなる姿勢をとっていたかを明らかにするとともに、彼女が、国際的視野にたつて女性問題と取り組み、「コスモポリタニズム」にその解決策を見いだした経緯を描いている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、スケールのとても大きな革新的論文であり、中国語はもとより、日本語・英語に精通した著者の語学力を駆使した力作である。著者の目的意識はとても明確で、先行研究をしっかりと見据え、いまやなくてはいけない課題を的確にとらえ、しかも自己の能力の幅を考慮にいれ研鑽をつんできた著者の努力の成果といえる。著者は、自身のもつ国際感覚に導かれて、日本では入手できない資料をアメリカと上海で入手し、それを丹念に読み込み、従来の日本人研究者には不可能な仕事を達成した。特筆すべきは、本論文の一部は、すでに国際会議で口頭発表し、外国雑誌に掲載されていることである。

田村俊子研究は、1960年はじめ第1回「田村俊子賞」が制定されて以後のことであり、当初の関心は、もっぱら人物批評・逸話紹介・印象批評であったが、1980年代後半にはいり、フェミニズム批評の研究枠が導入され、また、『田村俊子作品集』全三巻が刊行されてからは、作品解釈がなされはじめ急速に研究が進展した。1990年代後半から今日まで、さらにジェンダー論が導入され、研究は異性愛と非異性愛の領域にまでその射程を広げた。これによって、強制的異性愛の秩序への挑戦という俊子の姿勢が見えてきた。また、

同時期、バンクーバー時代と上海時代の資料も一部発掘がなされてきた。

こうした研究動向を十分に視野におさめた著者は、女性問題をあつかう研究の対象が、俊子がバンクーバーへわたる以前の作品に限定されていること、そして、海外での俊子の仕事をめぐる研究が、いまだ資料発掘にとどまっていることを見定め、研究対象を俊子が日本を離れてからの仕事へと拡大し、さらに、俊子晩年の上海時代の仕事までをその視野におさめた。そのことによって、従来、研究の関心が「両性間の問題」に限られていたのにたいして、日系移民の問題、社会主義、労働問題、そしてそうした視点からとらえられた女性問題へと俊子の関心が移行したことを発見した。こうした視点からの追求の結果、本論文は、従来、評価されてこなかった日系社会を描いた作品の再評価をおこない、一層の研究を喚起するとともに、そこで発掘された俊子の出会った欧米文学や同時代問題の研究価値を提示することができ、新たな研究領域を開発したといえる。

とはいえ、本論文に欠点がないわけではない。広範にわたる資料の整理から読解、そしてその価値評価など多岐にわたる作業のために、各テキストがもっと多面的な読み込の可能性があるにもかかわらず、一面的な読みに終始した印象をうける。とはいえ、この課題は、今後の著者の努力に任せることができるものであり、決して本論文の画期的な価値をそこなうものとはいえない。

よって、著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。